Osaka University Knowledge Archive

Title	「忘れた」ということの相互行為分析 : 活動進行に必要かつ充分な情報提供
Author(s)	千々岩, 宏晃
Citation	日本語・日本文化研究. 2017, 27, p. 128-138
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69222
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「忘れた」ということの相互行為分析
―活動進行に必要かつ充分な情報提供―

千々岩 宏晃

1. はじめに

本稿は，雑談の参与者が記憶について言及するとき，それがどのような相互行為的資源となりうるのか，その方法のなかの一つを記述するものである．本稿では特に，参与者が「忘れた/覚えていない」という動詞(心的述語)を使用するとき，しばしば参与者が行為の進行に“必要かつ充分な情報を与えた”ことを表示していることを示す.

2. 先行研究と研究の目的

本節では，関連研究における 2 つの立場を提示し，本稿の研究の目的を示す.

日常会話における記憶を対象とした研究は，大きく分けて二つある．一つは，言説心理学(Discoursive Psychology, 以下 DP)の研究，もう一つは，エスノメソドロジー· 会話分析(Ethnomethodology and Conversational Analysis, 以下 EMCA)の研究である.

DP は，Potter and Edwards(2013)も述べるように，記憶を「言説の中の現象を説明する概念ではなく，トピックとして扱う」という点で，日常生活における記憶を扱っている．DP では，心理的現象を説明のリソースとするのではなく，それがどのように人々の会話で生じるかを明らかにすることを目的とする，とされている．言い換えれば，人々の振る舞いを資源として，どのような心の構成概念が存在するのかを解明することを研究の目的としているというわけだ(Depperman, 2012; Edwards, Middleton and Potter, 1992).

それに対し，EMCA では，認知的· 心的な術語自体を分析に適用することに否定的な立場がその多くを占める．例えば Coulter(2005)や Lynch and Bogen(2005)は，cognition/memory という概念の使用が個人内部へ帰属するという誤解を与えることがあり，それら概念を相互行為の分析に用いることは余剰· 無用である，という立場をとっている.

もちろん，分析上無用ということは，即座にその概念自体が存在しないことを意味しない．我々は確かに，様々なことを記憶している．例えば「ヘモグロビンが何をするか，覚えてる？」と聞かれたら，我々は「もちろん．体に酸素を運ぶんだろ?」と記憶をに基づいてこたえることができる.

しかし，発話には状況に依存する．例えば，患者が診察室で心臓外科医に「先生，ヘモグロビンが何をするか，覚えていますか」と尋ねるとしたら，それは異常な事態だと感じるだろう.「あなたは医者なのに，ヘモグロビンの作用も知っていないのか」というように,【非難】や【挑戦】として理解される可能性があるからだ.

なぜ異常なのか．それは我々は，「記憶は”忘れる妥当性”があるときにおいて尋ねること

ができる」という規範性を持ち合わせているからだ，と考えられている．西阪(2001)はこれを【忘却の規範性】と呼んでいる．一般人であればヘモグロビンの作用を忘れていても理解できるが，心臓外科医がそれを忘れていること事態が想像しにくいし，もしそうだとしたら，その人を医師と認定すること自体に疑問を抱くだろう．ゆえに，その質問自体が医師の資格を問うものとして働いていしまうのだ．

この(想像上だが母語話者の直感に合う)事例を見ると，相互行為において，記憶が個人内部にあるかどうかということ自体，そもそも相互行為上問題(=有意; relevant)ではない．むしろ社会的なカテゴリーに随伴して存在が有意になる場合があり、そちらこそが相互行為の記述においてなされるべきものである(cf.　西阪, 2001 ; Lynch and Bogen, 2005).　ゆえに，いわゆる「記憶」概念は、行為の記述にとっては局所的に，相互行為上の合理的な要請に応じて利用される資源であり，普遍的に有意(omni-relevant)ではない．

以上 EMCA からの批判を考慮するならば，DP は第一に,すでに言語的な相互行為を記述する以前に，心理主義をトピックとして分析の前提に持ち込んでしまっている．第二に，心理状態が常に指向されるものとして扱っている．この 2 点は，ともすれば，相互行為を分析･記述する際に研究者の恣意的な解釈を事象に付け加え，相互行為的側面を排斥し，記憶を個人内部に還元してしまう危険性をはらんでしまうだろう．

しかし同時に，たとえ「記憶」やその他認知的な過程が相互行為を分析･記述する際に不要である風潮があっても，人は確かに相互行為の場でそれらを”言い回し(Coulter, 2005)”として用いることがあり，それは確かに現象として存在する．本稿では「覚えていない」「忘れた」のような，従来，心的述語(クルター1998=1979)と呼ばれてきた発話を分析し，それらがどのような相互行為的資源でありうるかを記述することを目的とする．なぜ人々は，直感的には“情報の不在”と聞かれるような，一見無駄とも思える「忘れたこと」をわざわざ言うのだろうか．そのことを分析することは，「記憶」がいかに参与者によって指向されているかを見るうえで，意義のあることだといえるだろう．

3. 分析対象とその方法

本稿では，雑談中に「覚えていない」「忘れた」と言及されているデータを，会話分析の方法をもちいて分析する．会話には日本語母語話者同士の電話会話を録音したコーパスデータ(MacWhinney, 2007)と，稿者がコンパクトカメラとボイスレコーダーを用いて収集した雑談の録画データ，ならびにそれを書き起こした文字化データを利用した．文字化の記号については付記を参照されたい．

会話の総時間数は約 17 時間．収集した断片は 78 例である．本稿では，その中から 2 つの断片を例示する．

収集過程では，変化形を含めた「忘れた」「覚えていない」が使用される発話を収集した．それらを連鎖環境(cf.　Schegloff, 2007)に応じてラベリングした．ラベリングでは，【情報提

供】―【受け取り】,【あいさつ】―【あいさつ】のような行為の隣接ペア(adjacency pair)を中心に行為を記述した．本稿記載の断片については，視認性確保のために【】で行為を示した．行為がいくつかの発話にまたがる場合は TCU(Turn Construction Unit：ターン構成ユニット)の発話行に行為を記した．また，SCT(Sequence Closing Third:連鎖を閉じる第三連鎖)については分析に必要に応じて記述した．

4. 分析

第 2 章で述べたように，本研究では「忘れる」や「覚える」という記憶に(一見)指向しているような単語が，相互行為上どのようなふるまいをしているのかを明らかにすることにある．なぜ人々はわざわざ情報の不在に聞かれうる，記憶の不在を言うのか．それを探るために，2 つの断片を例示し，分析していく．

断片 1 は，KN と YU が電話で話をしている．YU は，KN とお昼を食べるついでに，1 人で転職の相談をするために共通の知人である A に会おうと考えている，と述べる．しかし，YU は，A の会社に直接予告なく行くべきか，それともアポイントメントをとるか迷っている，という．YU は KN に，A に電話したほうがいいと思うか，と聞き，KN はまずアポイントメントをとるべきだと冗談気味に助言する(862 行目).

断片1． japn6698 [寄ってみてだったか遊びに来てだったかは忘れちゃったけど]

```
862 KN: う::ん.やっぱ.hhh<何事も>.hh アポは電話が先(h)よ(h)hoho【助言】
863 YU: あぁ:::[そっか.                                          【受け取り】
864 KN:        [¥.hh よくわからんけど uhuh!¥.hhh[なんか:::.h ん:  【変更】
865 YU:                                          [う:::ん.
866 KN: でも電話::してみてぇ:,遊び来ていいですかとかって, .hh
867     ゆっても[いいしぃ:::,¥なんか h-¥                          【助言】
868 YU:        [hahahaha.hhh 遊びに行っても aa-[あそっかぁ:.   【受け取り】
869 KN:                                         [.haha!.hhh あっ,
870     そ:::,ま:::なんかお話:::,
871     (0.6)
872 KN: まぁ,電話:::してみたほうがびっくり::しないかもしれない
873     [し:::,                                                  【助言】
874 YU: [あぁ::そうだよねぇ?                                     【受け取り】
875 KN: ゜う::ん.゜[.h まえ o::やった時はぁ,向こうの人が:::,
876 YU:            [゜うん.゜
877 KN: あれぇ?電話する::とかってゆったぁ?                      【情報要求】
878 YU: .hh
```

```
 879        (.)
 880  YU:   ううんあのぉ違う-あｈぁｈ.                          【情報提供-開始】
 881        (1.4)
 882  YU:   >うん<電話も:::うん.その時にあのまた:::あのぉ:::,
 883        (1.2)
 884  YU:   わかったら,
 885  KN:   [うん.
 886  YU:   [連絡する:ってゆってぇ,電話番号渡したんだけどぉ,
 887  KN:   う:::ん.
 888  YU:   それで::じゃ「↑た↑ま↑に↑あ↑の:::,」あの::「寄って
 889  YU:   みてよ!」
 890        (1.8)                    添加
→891  YU:   って言い方されたのね?=寄ってみてよか遊びに来てよっていっ
→892        たか(わぁ/はぁ)-忘れちゃったんだけどぉ_              【情報提供-終了】
 893  KN:   あぁ!う::ん. .hh[あぁそっかぁ.,                      【理解】
 894  YU:                    [うん::だから:::,
 895        (.)
 896  YU:   あぁ[の-
 897  KN:      [じゃあ:::,
 898        (0.3)
 899  KN:   行ってみ-                                            【助言】
 800        (.)
 900  YU:   [う::ん.                                             【受け取り】
((この後 KN は A がどんな人か知らないのでわからない,何度か前もって電話してもいいと
思う,と述べる.結局 YU がどうするかは決まらない.))
```

KN が「<何事も>」という言い方が，冗談めいた音調でなされていることに対して，863 で YU はそれを冗談ではなく真剣に受け取っているように理解される．「あぁ:::」は冗談に対する反応というよりは，納得した，というときに用いられるだろう．

それに対して KN は，864「よくわからんけど」，872「びっくりしないかもしれない」と述べる．これは，先の助言を，より確証の低いものへと変更している．さらに，875，877KN で詳しい経緯を聞いているのは，状況を再考しようとしていると理解される．

YU はそれに対し，880 から，その時の状況を説明し始める．YU は訪問先である A 自体の言い方が曖昧で，アポイントメントが必要であるかどうかわからないということを，A の発話を引用するやりかたで述べている．891 で，「言い方」，という言葉を用いている

ことが，その発話がいかに YU を混乱させるものであったか，ということを示している．

ここまで，KN は一般論(何事においてもアポは取るべきだ)を述べることで助言する立場にあった．しかし，YU の説明によって，アポイントメントの要-不要が訪問先の A 氏の言い方のあいまいさにある，というように個別具体的な，特殊な状況へと変化し，立場の変更を余儀なくされてしまった．一般論では対応できないような事態に YU が陥っていたことが，ようやく KN に明らかにされるのである．

892 行目で YU が「忘れちゃった」と述べている内容は，言い方がどちらでも，アポイントメントが必要であるかどうかわからない言い方だ．ここでの「忘れちゃった」では，「詳細はどちらだったか今ではわからない」こと，しかし相手が「そのどちらかを言った」ことは確かである(cf. Coulter, 1979＝クルター, 1998, p. 120)こと，という対比的な知識を対比の取り立て助詞「は」を用いるとともに示している．さらに，「それ以上情報を持ち合わせていないこと」が示されている．これは， 891 行目の後半は，ラッチング(=)によって添加(increment)されており，892 行目「けどぉ」で，それが前の発話に先行すべき要素であったことが示されている．

また，873 行目の【情報要求】に対する応答としての 892 行目の終了に対して，893 行目で KN は連鎖を閉じている(Sequence Closing Third, Schegloff; 2007). これは 873 行目からの情報提供に対してさらなる情報や発話の修復を求めるのに適切な位置であるが，それを KN は利用していない．

まとめると，次のように記述できる．

①KN が取っていた「知るものー知らないもの」という参与枠組みが，具体的状況を知る YU によって反転させられた後に起こっている．

②「言い方」に関する知識を「忘れた」ということで，他の部分の知識(どちらかの言い方で誘いを受けたこと)は正確である，ことを対比させている．

③より事情に詳しいもの(YU)が，詳しくないもの(KN)に対して【情報提供】している．

④忘れた内容は，893 行目で連鎖を閉じることで新しい情報としてそのまま受け取られ，詳しく YU に情報を求めることはできない(しない).

次の断片 2 でも，同様の状況が起こっている．職場の近況が語られている．KK と OY は同じ職場で働いていたが，KK は退職する一方，OY はその職場に残っている．2 人が働いていたときに同僚だったアンディーが職場を去ったことが話題にのぼる．

断片2． japn6688[なんかのデパートか忘れたけど]

```
00  KK: .hhhhhh °ほぉんと°-=でもぉ,アンディーもあれだね?ついに:::,
01          (.)
02  KK: .hhh[あのぉ::あそ[こを,  ((あそこ=職場))          [25m27s]
```

03 OY: [.hh [よかったよね!
04 (.)
05 KK: 地獄をさってやっ[と. 【情報提供】
06 OY: [うぅ:::ん. 【理解】
07 KK: うぅ::[:ん.(.)と!今はダニスがぁ, 【確認要求】
08 OY: [dch-
09 OY: 今はそう.¥ダニスがぁ::¥ちゃんと働いて::, 【確認】
10 KK: あれやってるわけ[ね?も:うなん[かぁ, 【確認要求】
11 OY: [うぅん. [( )が::あの起きてクッキン
12 [グをしてぇ, 【確認】
13 KK: [(ブレッドランナー)うぅ::ん. 【確認要求】
14 (0.6)
15 OY: .hhh たぶんね学校四月かぁ::-.あっ! 【情報提供】
16 (0.4)
17 OY: °たぶん来期ってことはえいつやぁ.=来期って今度いつだろ.° 【自己修復】
18 (0.4)
19 OY: 学[校. 【自己修復】
20 KK: [.hhh
21 (0.3)
22 OY: ↑な[つからか. 【確認要求】
23 KK: [いやぁ-
24 (0.2)
25 KK: あのぉ:あれだよもう,もう始まるんじゃない? 【確認】
26 (.)
27 KK: たしかあそこセメスターでしょぉ::.だからぁ,.hh 【確認要求】
28 OY: あっそうなんだ. 【受け取り】
29 KK: 今月の終わりかぁたぶん,
30 (0.2)
31 KK: 二月のぉ,なんか言ってたもん冬から入れるんだって. 【情報提供】
32 OY: あっそうかそうか[だっ,だからかだからか:::. 【理解】
33 KK: [う:んう::ん.
→ 34 KK: .hh なんかねぇ::[あのぉ:::なんだったろなんかので-デパート 【情報提供】 添加
35 OY: [うんうん. 【継続支持】
→ 36 KK: か忘れたけど fu-あの:::,(.).hhh マスターだけどもぉ, 【情報提供】
37 OY: うぅ::ん. 【理解】

38 KK: あのぉそうそう冬からでも入れる[ようなp-プログラムぅ:::(.)にぃ:,
39 OY: [いけるんだ.
40 KK: とかっつってさぁ. 【情報提供】
41 OY: ↑う↑ん↑う↑ん↑[↑う↑ん↑う↑:↑:↑ん. 【理解】
42 KK: [う::んであの人はそういうのあってるよぉ. 【評価】
43 OY: .hhh[あってるそういうやっぱ本のなかでそうやって勉強してねぇ,【同評価】
44 KK: [あ-あ-アカデミックとかその- 【評価】
45 KK: そうそうそうそう. 【同意】
46 OY: やんのが.

OY も KK もアンディーの近況について“ある程度の”知識があることを示している．しかし，OY の 15 行目からの発話は，OY がアンディーの近況を，それを知らないであろう KK に伝える，というようにデザインしている．と同時に，17 行目の「たぶん」などからもわかるように，OY にとっても，その情報は確固たるものではなく，情報提供は自己修復され，立ち消えてしまう．

23 行目から，OY と KK のアンディーに対する知識についての状況は急変する．23 行目の音調的強勢で，オーバーラップにおける競合に打ち勝った KK は，25 行目で「アンディーの学校が始まる」と情報提供する(1)．その後，27 行目で，学校がセメスター制であること，2 月から入学できること，そしてなによりもそれがアンディーから直接聞いた情報(First-hand information)であることを述べる．第三者に関する情報を，当の本人から直接聞いた情報であることを言うことは，その真正性を宣言するために誰か別の人から聞いた情報と比べて有効な手段のように思われる．このことは，OY が想定したよりも KK がアンディーから多くの情報を仕入れていたためにおこった，OY による KK の知識の見積もりの誤りを明らかにしている．

その後の 34-36 行目は，一度閉じられた 31-32 行目の連鎖に添加されている．「どこのデパート(メント=学科)か，ということの詳細は忘れた」が，しかしマスターコースで，(前にも述べたように)冬であることが述べられる．同じことを繰り返すことは，「これ以上語ることがない」ことを示していると理解できる．さらに，37 行目で OY は情報を受け取ったことのみを示しているようにみえる．

これは，　断片 1 と同様，以下のようにまとめることができるだろう．

①OY が知っていると思った以上に，実は KK の方が知っていた，という「知る者－知らない者」の参与枠組みが変化した後に起こっている．

②どこのデパートメントかはわからない，という部分的な知識を知らないと述べることで，他の部分の知識(マスタープログラムであること，冬入学であること)は正確である，ことを比較し，主張している．

③より事情に詳しいものが，それほど詳しくないものに対して情報提供を行っている．
④37 行目でもなされているように，「忘れた」部分をそれ以上詳しく KK に情報を求めることはできない(しない).

5. 考察

以上，2 つの断片を見てきたが，連鎖環境は異なっていながらも，記憶にまつわる心的述語の使用を，以下のように特徴づけることができるだろう．

まず，「忘れた」という記憶表現の使用は，対比的に忘れた部分を示すことによって，覚えている部分を主張すること，いわば「知識の線引き」に用いられている．その意味で，「忘れた」ということは，対比の「は」や接続詞「けど」とともに用いられ，記憶の欠如を表しているのではなく，むしろ記憶の部分的な現存を主張している．

つぎに，記憶にかかわる心的述語が使われる状況は，知識の見積もりの失敗によって引き起こされることが多い，という傾向がある．断片で見たように，知識の見積もりが失敗し，知るもの-知らないもの，というカテゴリーが逆転，または変化した後に起こっている(2).

断片 1 における「相談」では，相手の状況を逐次参照しながら，相手に適切な助言を与えることが目下，参与者の目的とされている．その意味で，助言を与える人は，与えられる人の状況に関してすべてを知っているわけではなく，相手の情報提供を部分的に理解するほかない．そのような意味で，知識の見積もりの失敗が容易に起こりうる状況であることが予測される．

また，断片 2 における「共通の知人の噂話」という活動では，その共通の知人と別の参与者が自分の知らないところでどのようなやり取りをしているのか，ということをすべて知り得ることはできない，そのような意味で，知識の見積もりや失敗が起こることは予測可能である．

これら二つの知識の見積もりの誤りが起こりやすい状況が，「忘れた」「覚えていない」という言葉の使用の必須条件であるとは言えない．しかし，このような知識の状態の逆転が起こった後に，知識を持つものが(語れる範囲を線引きすることによって)知識の存在を主張することは，その逆転が正当なものであることを主張することになるだろう．

最後に，参与者が「忘れた」ということで行っていることは，断片 1「相談」，断片 2「噂話」という活動を進行させるための，必要かつそれで充分な情報(3)を与えていることを示し，活動を先に進めることに貢献している．

断片 1 の「相談」では，「A の言い方については知識を持っていない」ということで，「どちらの言い方にしても，それは曖昧な言い方だった」という知識は持ち合わせている，という対比を行っている．それは，「曖昧な言い方」である部分が忘れられていることとは関係なく“相談”という活動が行われたことを示している．もちろん，覚えているに越したこと

はないのだが，しかしそれがなくても，実際に活動が前進していることを参与者が指向していることを考えれば，忘れていたとしてもそれ自体が活動の達成に充分な情報であったということが示されているといえるだろう．

同様に，断片 2 の「噂話」では，共通の知人に対する現状についての情報提供が目下の目的になっている．

「なんのデパート(メント)か忘れた」ことを言うことによって，参与者は知っている - 知らない知識の線引きを行う．そのことで，共通の知人の所属に関する詳細情報が，それ以上発話されないことを参与者は承諾している．その後，すでにした話を繰り返すことで，情報提供の終了を予示していることから，情報提供が噂話を行うに足りる形で示されたことを，参与者が指向していることがわかる．

確かに，「忘れた」ことに関してそれを「思い出して」と受け手は要求することもできる．しかし，その発話が妥当でありうるのは，主にそれを思い出すことが有意になる場面，つまり，必要性，緊急性，思い出す役割としての妥当性があるときにおいてだろう．例えば，A と B の 2 人がドライブに行こうとするときに車の鍵がなく，A が B に「どこに置いたか思い出して」というときには，“まさに今それが必要である”いう必要性と緊急性，そして“B が車の鍵を最後に触った人である”というような B の想起が妥当であるということが説明されうる形で文脈に現れている．しかし，今回のケースにおいて「思い出して」といおうとするならば，その必要性/緊急性/妥当性を説明できるような形で提示されなければならないが，連鎖上適切な位置でもそのようなことは行われていない．翻って考えれば，受け手にとって，その情報は取り立てて今必要な情報ではなく，今ある情報が進行には充分であるということを示していると考えられる．

以上のことから，「忘れている」ことは単に記憶の欠落や不調をあらわすのではなく，活動進行に必要充分な知識を提供し，不確定な要素はさておいて話を先に進めようというその表示になっているといえる．さらに，参与者がそれ以上情報を要求しないのは，今起こっている活動に必要かつ充分な情報が示されたことを証拠づけているといえる．

6. 結論

本稿では，従来心的述語と呼ばれてきたものの中でも，特に記憶に関する発話がどのような相互行為的資源として用いられているのか，ということの一側面を明らかにした．

まず，「忘れた」ということが、覚えている部分を明確にすることに用いられていることを示した．「忘れた」ということは単に記憶の欠落を語るものではなく，むしろ逆に，忘れられた部分以外の記憶の存在を主張する手立てになっている．

そして，その知識の線引きは，知識の見積もりの失敗によって引き起こされうることを示した．「ここまでは私は知っている」という知識の線引きは，知識の見積もりの失敗によって逆転したカテゴリーの正当性を主張する資源となっている．

最後に，「忘れた」ということで，必要かつそれで充分な情報を与え，活動を進行させることを指向していることを示した．与えられた情報が，その活動を行うことにとって過不足なく与えられていることは，参与者がその活動を滞りなく行っている[4]ことからも例証される．

多くの先行研究が示すように，記憶にまつわる心的述語の使用はいくつかのバリエーションがある．今回の研究においても，「忘れた」「覚えていない」などの心的述語が，記憶の欠落を述べている，ということ以上の働きをしていることを確認した．

参考文献

英文

Coulter, J. (2005). Language without mind. *Conversation and Cognition*, 79–92.

Deppermann, A. (2012). How does “cognition” matter to the analysis of talk-in-interaction? Language Sciences, 34(6), 746–767.

Dimulescu, C. (2009). a CA Versus a CDA Approach To cross-gender talk-in-interaction. Transilvania University of Braşov , 2(51), 183–188.

Drew, P. (1992). Contested Evidence in Courtroom Cross-Examination: The Case of a Trial for Rape. *Talk At Work : Interaction in Institutional Settings*, 470–520.

Edwards, D., & Potter, J. (2005). Discursive psychology, mental states and descriptions. *Conversation and Cognition*, 241–259.

Edwards, D., Middleton, D., & Potter, J. (1992). Toward a discursive psychology of remembering, The Psychologist, 5, 441-446.

Goodwin, C. (1987). Forgetfulness as an Interactive Resource. Social Psychology Quarterly, 50(2), 115–131.

Goodwin, M. H., & Goodwin, C. (1986). Gesture and coparticipation in the activity of searching for a word. Semiotica, 62(1–2), 51–76.

Goodman, S., & Walker, K. (2016). ’Some I dont remember and some I do: Memory talk in accounts of intimate partner violence. Discourse Studies, 18(4), 375–392.

Lynch, M., & Bogen, D. (2005). “My memory has been shredded”: a non-cognitivist investigation of “mental” phenomena. *Conversation and Cognition*, 226–240.

Lynch, M., & Wong, J. (2016). Reverting to a hidden interactional order: Epistemics, informationism, and conversation analysis. Discourse Studies, 18(5), 526–549.

MacWhinney, B. (2007). The TalkBank Project. In J. C. Beal, K. P. Corrigan & H. L. Moisl (eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, Vol.1. Houndmills: Palgrave-Macmillan.

Potter, J., & Edwards, D. (2013). 35. Conversation Analysis and Psychology, In. Sidnell, J. and

Stivers, T. (ed.). *The Handbook of Conversation Analysis*, Wiley-Blackwell, 701-725.

Potter, J. (2006). Cognition and conversation. Discourse Studies, 8(1), 131–140.

Sacks, Harvey (1995=1992). Lecture 2 Features of a recognizable story, Story prefaces; Sequential locator terms, Lawful interruptions, In. Gail Jefferson (ed.) *Lectures on Conversation,* Volumes I, II, Blackwell, 17-31.

Schegloff, Emanuel A. (2007). *Sequence Organization in Interaction*. Cambridge University Press

Wooffitt, R. (2005). From process to practice: Language, interaction and“flashbulb” memories. *Conversation and Cognition*, 203–225.

和文

クルター , ジェフ . (1998). 『心の社会的構成』. 新曜社. (=Coulter , J. 1979. *The Social Construction of Mind. Macmillan*)

田邊尚子. (2010). ディスカーシヴ・サイコロジーにおけるディスコース分析のアイデア ー語彙の連関的使用への注目ー. 年報社会学論集, (23), 83–93.

西阪仰. (2001). 『心と行為』. 岩波書店.

付記:論文中に用いられている転写(トランスクリプト)の記号

.	下降調であること	. hhh	吸気	¥文字¥	笑いを含んだ音調
,	継続調であること	hhh	呼気	文(h)字	笑いながらの発話
文字_	平板調であること	文字?	発話末の音調の上昇	>文字<	話速が早いこと
↑文字	音調の急激な上昇	文字¿	発話末の音調の上下動	<文字>	話速が遅いこと
↓文字	音調の急激な下降	文字!	勢いのよい発話末	文-	途中での音の途切れ
文字:	音の引き伸し	º 文字 º	話声が小さいこと	文字	話声が大きいこと
[文字	2 行で用い発話の重複	文字	話声が大きいこと	字=字	途切れていない発話

脚注

[1] 「んじゃない?」という相手の反論を許す形になっていることをには注意を要する OY はこの段階ではまだ「えぇそうだっけ?」などと KK の情報の間違いを精査することができる.

[2] ここで「A ならば必ず B」という法則のようなものを主張しているわけではない．むしろ，A という状況ならば B が必要になることは当然である，という傾向だ.

[3] ここでの「必要かつ充分」であることは，条件における「必要十分条件」とは異なる．ここで主張したいのは，ある活動を進めるために必要である情報が提示され，そして忘れていた部分は問題にならないように，その与えられた情報で充分に活動が行える，ということを参与者が指向しているところである.

[4] ここで例えば「滞りなく行っていないから相談しているのではないか」という指摘は，このケースには当てはまらない．というのも，相談している「内容」に関しては確かにうまくいっていないものの，この局所的な場面において「相談という活動自体」は忘れた内容に言及することなく(言い換えれば詳細にかまうことなく)進行しているからである.